

第七回星野立子賞受賞句集

『水 瓶』 三十句抄

対中いずみ

何かよきものを銜へて雀の子

どこからが龍どこからが秋の水

壬申の乱をはるかに麦青む

亡き人の眼をのみ畏る稲の花

雨の土苗札につき鉢につく

言霊のはじめ檸檬のしぶくごと

はなびらのすりぬけてきし桜かな

月仰ぐ猫の粗相を拭ひつつ

日沈みなほしばらくや竹の秋

団栗に石段があり渚あり

わたくしの龍が呼ぶなり春の暮

思ふより熱き兔を抱きにけり

着信の青き光やみづすまし

冬うらら龍の卷髭伸ばしたく

白雲に黒雲入りぬ杜若

一面の落葉に幹の影が乗り

魚そよぐやうに竹の葉降りきたり

遠山は海の如くに十二月

そのまはりかすかな水輪墓

鳥のほか川しづかなる裕明忌

蓮の葉に氷のやうな水の玉

鴨の水尾うしろの鴨に届きたる

人の顔白く浮かべる網戸かな

わからなくなり水仙のやうに立つ

水を見てゐて沢蟹を見失ふ

氷のかけら氷の上を走りけり

半裂の手の握らるることのなく

ふらふらと笹の葉影や雪の上

やぶからしそれからへくそかづらの蔓

雪つよくなれば水鳥沖をさし